

地域連携型教育について — ゼミの活動を通して (2)

有村 安生*

キーワード：地域連携・コミュニケーション能力・問題解決能力

Educational Program for Community-based Cooperation (2)

Yasuo ARIMURA*

Abstract

The purpose of this research report is to demonstrate the educational effect on the field work. Most universities have some objectives for students to attain before graduation, such as the areas of the communicative ability and problem-solving ability. But it is very difficult for them to foster these abilities only by attending some lectures. Some universities including this university adopt new ways of learning, that is, the participatory learning and try to foster these abilities through the participatory learning. In this second paper it is reported on what the students think of the participatory learning, and whether they can acquire thinking skills, problem-solving ability, and a creative attitude to deal with problems.

KEY WORDS : Regional Cooperation, Communicative Ability, Problem-solving Ability

はじめに

平成23、24、25年度はイギリスのナショナルトラスト運動を念頭に入れて、地域の環境ボランティアへの参加、地域商店街の活性化運動への参加、地域農園での農園体験を通して、地域の人々がいかに自然の景勝を保全しようと努力しているか、街並みをいかに再生させようと努力しているか、また田園の景観をいかに荒廃させないよう努力しているかを調査することにした。

まずはじめに学生達に「ナショナルトラスト運動」という聞き慣れない運動に関して、ビデオを見せて、その運動に関しての感想を聞いてみた。

① ナショナルトラストの運動で世界数々の歴史的建造物が保護されている。この運動がなかったらほと

んどのは崩壊していただろう。1800年頃から産業が発達しだし、森などがたくさん失われる中で、ナショナルトラストが現在までにたくさんの貴重な財産を守り抜いてきた。この運動は子供たちの教養にも繋がるはず。これからも保護してほしいと思います。

② 今日の授業で学んだことは、ナショナルトラストはボランティア団体で、保護させるべき場所を指定して、買い上げ管理などすることが分かりました。こういう団体は本当に大事だと思うし、素晴らしいことだと思います。こういう団体を世界でもっと拡大していくべきだと思うし、世界を綺麗にしていけたらいいと思う。今日の授業でいろいろ考えることがあるし、学ぶことができとてもよかった。色々な歴史を知れて楽しかったです！

③ 今回、古い建物や自然を守ろうとする団体「ナシ

ショナル・トラスト」について学びました。これは、イギリスで産業革命が始まった頃から100年以上活動していて、このような活動が新しい世代に芸術や自然の素晴らしさを強く伝えていていると思いました。日本でも昔からある建物や自然の大切さや素晴らしさを再確認していき、このような活動がもっと活発になるべきだと思いました。

- ④ ナショナル・トラストとは英国が歴史的建造物を保護するために設立されたボランティア団体であること、そしてナショナル・トラストは1800年代の建造物を中心に保護しているということ、保護している建造物が民家の場合なら家具があるなら動かさないように慎重に整備している。家具がないなら当時のような雰囲気を出すために家具を買い揃えて保護していること、他にもナショナル・トラストが保護している自然の地域があり、環境保全にも役に立っていることを学びました。
- ⑤ ナショナルトラストのビデオを見て、ポターのような感性をもつにはやはり素晴らしい環境も大事なんだと思った。日本ならばすぐにマンションやビルやらたくさん建物を建てていたはず。湖水地方のような素晴らしく優雅な街がポターのような感性を育ててくれたのだろう。そのおかげで今もピーターラビットなど子供の教養に必要な絵本が生まれた。これからもナショナルトラストにはたくさんの資源を守ってほしいと思います。
- ⑥ 湖水地方を愛した人にピアトリクス・ポターがいます。彼女は自然豊かな湖水地方で過ごした経験からピーターラビットの物語を生み出し、たちまちベストセラーになります。彼女はその印税などで湖水地方の土地を買い取って、湖水地方の自然を守っていきました。彼女の死後、遺言通りに彼女の守ってきたものは、ナショナル・トラストに寄付されました。今でも、彼女が作品に残した風景が残され、彼女の自宅はHill Top農場という名で一般公開されています。日本では、急速な経済発展によって多くの自然や古いものを失っていき、また国民の保護・保存についての関心もイギリスなどに比べると高くはありません。でも、今はこういったものを守っていくときであり、多くの人にこういった素晴らしいものを知ってもらいたいと感じました。

第1章 体験農園での学外研修

平成23年度学外研修は「地域との共生、フィール

ドワーク」というテーマで実施した。最初の4月末の研修は天候に恵まれ、大学から約15分位の所にある若松の広い農園とトマト農園で実施した。この天野農園は今年から市民に開放した農業体験型農園ということで、土地の耕起、道具、苗、肥料など準備されていて、初めての学生でも播種と植付だけで農作物の育成体験ができるということで安心して研修ができ、自然の中での体験や土と直接触れ合うことで、坐学では得られない心の癒しを感じる体験となった。

1. 天野農園とトマト農園

まずは農機具からの説明（シャベル、鍬、スコップ、レーキ、鎌など）と野菜の苗の説明であったが、名前は知っているが、植えつけられたジャガイモの新芽を他の新芽と間違える学生もいて、食べる野菜がどのようにして育つか知る環境が程遠くなってきていることを実感する。畑は粘土質で、保湿性があるということだが、乾燥したこのような畑で雑草を取るのには苦勞する。そして、日本の農業は主に除草型農業、外国は主に水掛農業ということで、昔から日本での農業は大変だったことが推測される。それからこれから育てる各野菜の係りを決める。品種はなす、ピーマン、ミニトマト、キュウリ、ズッキーニ、オクラ、シシトウ、大根、ブロッコリー、ジャガイモ、小松菜、ほうれん草、レタス、サトイモ、ツクネと15種類の野菜を分担して植えることになった。播種、植付、支柱立て、紐掛け、水遣りなどを行い、午前中の仕事があつという間に終わった。休憩時間では天野さんが丁寧に育てている完熟トマトを皆で食べたが、有機農業で育ててきたということで、普段購入するストアなどのトマトとはやはり異なる本当に美味しい味がして、学生もとても感心していた。

午後からは天野さんが大切に育てているハウスでのトマトの作業。普段何となく食べているトマトの管理がいかにか大事かを知ることができた作業であった。剪定の仕方、脇目の切り方など教えてもらい、慎重に作業したが、当日は25℃の暑さで、またそれがビニールハウス内での仕事だったので、汗をかきながらの仕事はだいぶ学生には応えたようである。しかし、その間、たくさんのお客がひっきりなしにトマト狩り農園に訪れることに触れ、生産者の立場（できるだけ綺麗で美味しいトマトを多くいかに生産するか、そのための日々の剪定と温度管理がいかにか大事であるか細心の注意を払う姿勢）と消費者の立場（美味しいトマトをできるだけ安く、いかに多く買うかという立場）の両

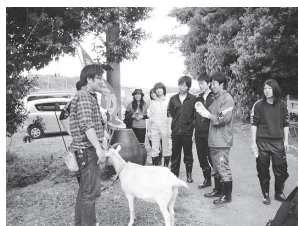
方を知ることになった。特に、生産者の立場からいろいろな課題があることも聞くことになった。

今回の最初の研修では、普段学生が慣れていない農園の大地とのふれあい、野菜の生命とのふれあいなど初めての第1回目の作業だったが、天野さんの丁寧な指導で学生も安心して作業ができ、農作物の成長がどのようになるのか次回の楽しみとして作業を終えた。

マルチの中に苗を植える



トマト農園前のヤギとの触れ合い



トマト農園での脇芽のカット



学生の感想

① 第一回目の農作業体験をさせていただきました。幸い天候にも恵まれて、晴れていました。9時に集まりバスに揺られて、農場に着いた後に、農家の人から、何を植えて、どのように植えるのか話していただきました。ナス、ピーマン、ミニトマト、キュウリ、ズッキーニ、オクラ、シシトウ、ダイコン、ブロッコリー、ジャガイモ、コマツナ、ホウレンソウ、レタス、サトイモ、ツクイモ、トウモロコシのどれを植えたいですかと聞かれ、一瞬迷いましたが、ナスにしました。畑に行き、ナスの苗を二つ持ってナスを植えさせていただいたのですが、植えるところを間違えてしまい、もう二つ植えさせていただきました。私が植えた、4つのナスがおいしくできたらいいなあと思います。植え終えた後に、熟したトマトを二つ食べさせていただきました。当店で並んであるトマトとは、やはり違った味を味わえたのと、とてもおいしかったので、二倍分の幸せを感じることが出来ました。昼食を食べ終えた後は、赤いトマトと青いトマトの間の葉っぱを取る作業をしました。しかし、すこし曖昧なところもあったので少し

しか作業が出来なかったのが、反省点です。第二回目の農作業をするときは、自分でも試行錯誤しながらやっていきたいと思います。

② 3年になって最初の農業体験で野菜作りを体験させていただきました。2年の時は田植えだったので前回と違う作業に手間取ることも多かったのですが、代表の天野さんに教わりながら進めていきました。16種類あった野菜の中から自分達が選んだのは、シシトウ、レタス、小松菜、とうもろこしでした。中でも意外と難しかったのは小松菜で作業自体は草取りだけの簡単な作業だったのですが、小松菜の葉と雑草の葉との見分けがつきにくく苦戦しました。それと時間が足りなくてできなかった。とうもろこしの作業を有村先生と原さんがやってくれたことはとても有難かったです。それぞれが慣れない作業でしたが、一日の農業体験を終えて、初めて野菜を作ってみて達成感と、自分たちの植えた野菜がどういう風に成長するだろうかという期待感を感じて、とても充実した一日を送りました。

③ 4月30日に農業体験に行きました。最初はみんな不慣れでしたが、天野さんの話を聞いて愛情を込めて野菜を作るという大切さを学びました。農家の方は毎日やっていると考えると大変だなと感じました。

④ 普段の生活では体験しない作業をし、野菜も生きているということを知り、収穫できたときの充実感を得ることがとても新鮮に感じました。

⑤ 今後2回FWに行きます。そのときには自分たちの野菜の特徴を掴んで収穫するときにみんなで喜べたらなと思います。

⑥ 今回、初めて農業体験をしました。私たちは農業に興味がありませんでしたが、農業体験をしていくうちに農業についてだんだんと興味がわいてきました。それから午後にトマトの作業に移りました。

⑦ トマト作りはとても大変でしたが、その面白さもあり、とても充実した農業体験をすることができました。

⑧ 昼食を食べ終えた後は、赤いトマトと青いトマトの間の葉っぱを取る作業をしました。しかし、すこし曖昧なところもあったので少ししか作業が出来なかったのが、反省点です。第二回目の農作業をするときは、自分でも試行錯誤しながらやっていきたいと思います。

2. 農園

2回目の研修は約30度位ある中、5時頃から6時ま

での夕方、3人の学生と除草作業を行った。3週間経っていたので多分、雑草がたくさん生えていて、野菜はあまり成長していないだろうと思いながら現地へ。昨日から急に気温が上がり、湿気もあり、汗をおおいかきながらの作業となった。予想通り、雑草の中に野菜があり、マルチを敷いたところには雑草はなかった。一畝毎に4人で作業に入るが、粘土質の土なので乾燥していて、小さなスコップに力が入る。始めの枝豆の一畝に15分掛かるが、次のブロッコリーは10分、次の畝は5分と調子に乗るが、ジャガイモの畝のところでは小さなスコップで掘るのには硬過ぎるので大きなスコップを用いて除草を行う。今は耕運機がなければ本当に農業は大変だと思う次第であった。熱中症予防のために絶えず水を飲みながら作業を行い、1時間経った所で今日の作業は終えることにした。黒マルチのある茄子、ピーマン、キュウリの所はさすがに雑草は生えてないので科学の力は強い。収穫できたのは小松菜で既に大きく成長し、路地ものなので緑が濃く、葉緑素を試すためか学生は生で食べていたが、味はどうであったろうか？来週は周りのごつい雑草を皆で取り、更にすっきりさせようと思っている。最後に水をかけ、更なる成長を願う。写真は、雑草の中のブロッコリー、マルチの中のキュウリ、ピーマン、雑草の中の枝豆、すっきりした枝豆の畝である。

除草前の畑



除草した後の枝豆



除草作業



3. トマト農園

3回目は台風2号の発生で、ここ数日雨が降り続けている関係で、4月の暑い中での作業とは異なり、18度位で、汗をかく気候でもなかったのでハウス内での

作業は前回よりは作業しやすかった。

今回は雨の関係で、ハウス内での作業となったが、トマトの背も大分大きくなり、4、5mは伸びていた。農作業は灰色カビ病にかかった葉、茎、実の除去と腐りかかった茎の所に菌を閉じ込めるために納豆菌を塗り込む作業を行った。この病気にかかると茎全体が腐っていき、イチゴなどの農作物全体にもある病気である。特に今日のような雨の降る湿ったときに発生する病気とのことである。トマトは南米のアンデス辺りが原産で、乾燥した地域の農作物で、日本のような異なった環境、地域で育てるには、そこで発生するいろいろな病気との闘いでもあるようで本当に大変である。

この塗布作業は単純作業なので学生は1時間位で疲れてきたようである。この間、他のイチゴ農家の方と話す機会もあり、5月ではハウスのイチゴは既に終り、今は来年度の新たな育苗の最中との事であり、今は一人で育苗を行い、農繁期には2人位パートを雇い、経営しているとのことであった。また、学生から有機農業での経営はどうかとの質問対して、費用対効果でいくと、経営的には難しいのではないかとの応えであり、個人的な有機での農作業と経営での有機作業の難しい課題を突きつけられた。

食事後、雨が少し上がったので、薬を塗る作業をしている学生を除いて、農園に行き、除草作業をした。雨のため除草は簡単なようであったが、残念ながら、粘土質なので、根についた土が重く、また、雨靴にも粘土が付き、思い通りにいかない。その後、雨が再度降り出したので、雨靴を洗い、午前中で今日の作業は終りにした。残りの支柱立てや農薬散布は来週の晴れた空いた日に学生と車で行くしかない。命あるものを育てる過程は苦労が多いが、実ったときの喜びを皆で分かち合いたいと思うし、生産者である農家の方の苦労を少しでも学生が感じてくれればと思う次第であった。

トマト作業



灰色カビ病



塗り薬作業



雨が上がった後の除草作業



学生の感想

- ① 雨の中の作業だったので午前中だけの作業でした。まずトマトハウスで灰色カビ病と言われるトマトを腐らしてしまうものを切り落とす作業をしました。空気感染してしまうものなので見落としがないように切り落としていきました。後半は雨が上がっていたので畑でそれぞれ担当している野菜の手入れをしました。主に除草作業をして終わりました。FW一回目から約一ヶ月でそれぞれ野菜たちが大きく成長していることに感動しました。
- ② 5月29日に農業体験に行きました。今回は灰色カビ病にかかったトマトを回収する作業をしました。病気のトマトを見分けるのがすごく大変でした。そういう病気があるのを初めて知りました。とてもいい体験ができました。

4. 農園

4回目は7月2日(土)の曇り空の蒸し暑い中での農作業で、前期最後のフィールドワークとなった。蒸し暑くなるので、熱中症だけには気を使い、クーラーボックスの中に水とスポーツドリンクを持参する。9時出発のはずだが、3名ほど遅刻し、少し発車が遅れる。前日まで雨のため、下地はまだ粘土質のため、ぬかるんでいる。今日の作業は大根、ジャガイモは根腐れを起こしているかもしれないので収穫、後はレタス、ミニトマト、シシトウの収穫とトマト、ピーマン、キュウリなどは支柱へ誘引、整枝をし、茄子、ピーマン、トマト、キュウリなどはマルチを外して、追肥を行う。追肥は市販の化成肥料ではなくて、有機肥料を微生物によって発酵させたボカシ肥料を使用するので、やはり収穫物は美味しいものができるようだ。

学生は月1回しか来れないので、雑草との戦いであるが、その中で、レタス、大根、茄子はたくさん取れ、キュウリなども期待以上のものが取れた。ジャガイモは小さいがそれなりに収穫できた。ミニトマトは脇目が多く、また整枝もしてなかったので、実の付き具合は悪い。枝豆も順調に育っているが、あと少ししたら

収穫が近いようだ。

蒸し暑いので、水の補給は絶えずするように促す。数名の学生が天野さんと車で出かけている間、隣の畑でスイカ栽培をされている農家の方と話す機会があった。若松はミニスイカも特産品であるとの事で、一つの苗に5、6個ならしていくとのことで、今日は卵大になったところに支柱を立てて、どこに成っているかを印を付けているところであった。雨が多かったせいか少し成長が遅れているとの事であったが、月末には収穫が始まり、ほとんどは地元へ供給するとの事で、遠い所に配送するほど作付けはしてないとの事、また、両親、祖母、子供4人の家族総出で仕事をしていた。只、農家の仕事はサラリーマンと異なり、ある意味で気楽にできるとの事で、明るい顔をされていたことがそれを証明しているようだ。

9時半から11時頃には仕事も終わったので、最後に天野さんを囲んで、農園の農道に坐り学生と話し合うことになった。

まず、天野さんはトマト農園の経営や他の農園をやるにあたって、この自然界には学ぼうとするものしか育たないし、生きられないという独特の話から切り出し、学生の甘い考えを変えるように話し出す。「人間界においてはこれまでは、わからない場合は教える先生が悪いとなる場合もあり、おかしな世の中になった。しかし、これだけ社会が落ち込み、経済状況も悪化すると、学ぶ姿勢や仕事ができない場合は切り捨てていく世の中になる。だから、学生時代の内から目標を持ち、学ぶ姿勢を持ち、楽しく人生を生きるようすべきであり、それを見出さない場合は落ちこぼれて入っても仕方がないのではないかと。楽しくするということは怠けるということではなくて、積極的に好きなことを一生懸命するという事で、それによって楽しさがいっそう増してくる。私は日本一のトマト農家になるために、楽しく人生を生きているが、君たちの目標は何であるか。確かに人と付き合うことは傷つきあう場合もあるが、それは成長の過程には必要なもので、その係わり合いの中から人間は成長するものである。」と学生に農園の中で丁寧に自然を相手にして、農業をすることの難しさから生まれた人生観を話してくれた。

次に全学生に、このFWに対する感想、あるいは目標などあるかどうか話し合い、有意義なうちに今回も終わった。農園前での話し合いなどは学生も初めてであろうが、良い体験であった。

第2章 堀川清掃事業参加

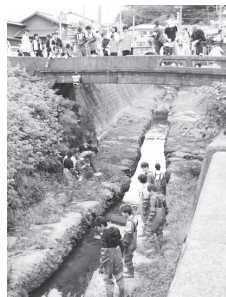
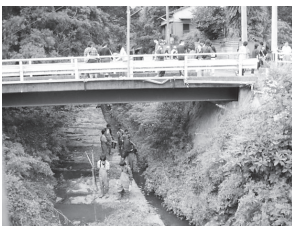
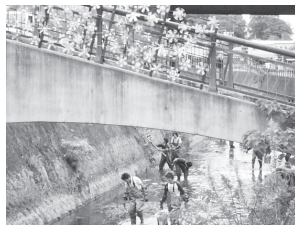
折尾にある大学近くの堀川は、遠賀川から分かれ、中間市、水巻町そして再び八幡西区折尾を経て洞海湾へと注ぐ運河であった。この川は江戸時代に開削され、洪水などの水害防止のために建設が進められてきたが、1891年には筑豊炭田から若松港への石炭輸送に重要な役割を果たしてきた。それで、この川は江戸時代の先人達が地域の繁栄を願い、長い歳月と苦労を重ね、幾多の困難を克服して造り上げた貴重な財産であり、2007年には、近代化産業遺産にも認定された。しかしながら、近年になってこの川への人々の意識は薄れ、一時、ヘドロとゴミがたまった川となっていたが、堀川まちおこし実行委員会が形成され、そして、かけがえのない流域の財産である堀川を愛する地域活動が開始された。それで、このゼミでもこの川の清掃活動を通して、ふるさとを愛する心と環境問題に対するモラルとマナーを向上させるために参加することにした。

平成23年度10月2日、8時半に大学祭実行委員、九州女子大大学祭実行委員、自由ヶ丘高校生の他、折尾の役所、企業、町内会住民など総勢約331名が参加して、駅前を中心とした堀川沿いの清掃作業を行った。当ゼミ生は主に折尾高校前の切通し付近の流域を清掃したが、切通し付近はかつて江戸時代に一部一枚岩をノミで工事して貫通させたとの事で、その歴史の跡を学びながら、住民の方と協力して清掃活動に参加した。

集合



川の中での清掃作業



折尾高校前の歴史のある切通し



学生の感想

- ① 地域の人達が大人から子どもまで、たくさん参加していてびっくりした。今年で10年目と言っていたけれど、10年も続いているのは、地域の人達が協力しあって川をキレイにしようという気持ちがあるからだと思います。川は私が思っていたよりきれいでした。年々の積み重ねが繋がってるんだと思いました。空き缶や食べたゴミなど小さなものがたくさんあったけれど、中には机や、すだれの様な粗大ゴミがあった。それは業者の人が運んでいる途中で捨てたりしたからと先生は言っていました。マナーを守れば、ゴミは減ると思うしもっと折尾がきれいな街になるとと思います。ゴミはゴミ箱に捨てる。当たり前なことだと思います。1人1人の心がけ次第で変われると思います。地域の人達と協力し合って何かひとつのことをするのはとてもいいことだと思います。また何か機会があったら参加したいと思いました。
- ② 今回、堀川清掃に初めて参加して、ボランティアの大切さや大変さを身をもって体感することができました。朝9時位はとても面倒だな、とか思っていたのですが、実際に川の中に入ってみんなで清掃活動をしている間にすがすがしい気持ちになってきて、後半は自ら進んで清掃活動を行いました。各大学や、折尾商連の人たちなどと交流を深められたと思うので堀川清掃を行って、とても自分にとってプラスになったと思います。これからもこのようなボランティア活動があったら、参加したいと思いました。
- ③ 私が堀川清掃に参加して学んだことは2つあります。1つ目は、堀川は人工の川だということです。人の手で石を削って作られています。実際に見てみて人工だということが分かりました。2つ目は、堀川の現状です。今回の清掃でタイヤや自転車、傘など行為的に捨てられたとしか考えられない物がたくさん見つかりました。開会式で第1回りのときのゴミの量を聞き驚きましたが、10回目の今回でもまだあれだけのゴミが集められ悲しくなりました。「ゴ

ミはゴミ箱に」一人一人が意識して取り組むだけでゴミは減ると思います。この活動を何年続けてもみんなの意識が変わらなければゴミはなくならないと思いました。

第3章 黒崎祭と折尾祭

黒崎地区にもシャッター街通り出現という不名誉な名前がはびこり、人通りの少ない街になりつつあることから、地域の商店街が立ち上がり、いろいろなテーマで活性化の運動がなされています。今回は地域の商店街の人との交流ということで、平成23年度にこの祭に参加することにしました。祭はかつて長崎街道沿いの宿場町ということで黒崎宿場祭と命名され、武者達の行列など行われ、出店が多く出て、祭を盛上げている。学生は2日間だけこの祭に出店し、話合いの末、北海道産のイモモチを販売することにした。店はパチンコ屋の近くで、うるさい場所であったが、客の呼び込み、販売、売上と貴重な体験をするようになった。

① 今日の研修は、10時から始まると思っていましたが、レンジが使えず結局11時から始まることになりました。10時から始まることにしているのであれば、その時間までにレンジを直しておくべきだと思いました。でないと、人は集まっているのに活動しているのかどうか分からないので、いもモチを買おうか迷っているお客さんも結局活動しているのかどうか分からないから買うのをやめてしまうお客さんもいると思うのでその点ははっきりさせておいた方がいいと思いました。今回黒崎祭りに参加させて戴いてパチンコ屋さんがたくさんある現状にびっくりしました。こんなにもスロットに人間はハマってしまうものなのかと…パチンコ屋さんがあんなに連なっていたら私たちがいもモチを焼いたとしてもパチンコ屋さんがあんなにあつたら不良の溜まり場だと私は思うので本当にパチンコ屋さんが好きな方でないとあの通りにはまず足を運ばないと思いますし、このままだとあの通りはもっと廃れていくのだらうと思います。だからもっと町を繁栄していこうと思うのであれば美味しいお店を出すとかしないといけないと思います。今回私は声を出していもモチを売っていきましたが、声を張って売るだけでは客は来てくれずやはり店から出ていっていもモチいかがですかといもモチを売り込めばもっといも餅が売れてたのではないのではないだろうか

と思いました。私も所詮受け身の姿勢で店を切り盛りしていたのがいけない原因なのだと思います。

② 今回の学外研修で、黒崎商店街の様子を少し知ることができました。お年寄りの方が多く若い人が少ない、シャッターで締め切られてたりなんだかさびしい感じでした。なぜシャッター街になったのか、やっぱり若い人が少なくなってきたからなのかなあと考えました。今回、黒崎祭りに参加するというのは知っていましたが何をするか全く知らなくて正直焦っていましたが、けれど先輩が「いもモチ」を作って売るということを聞き多少安心していもモチづくりに励みました。いもモチづくり、焼いて醤油を塗るという作業。この仕事を何年もしてるかのようなベテランさんが出てきたので、自分はもうホント見つつ補助をするというかなんとか…。ベテランさんが作りたいもモチ美味しかったです。他のゼミの先輩と今後の大学生活の話とかができ、いい経験になりました。次は大学祭、今回のいいところを伸ばし売り上げに貢献できるように頑張りたいです。

この他、平成24、25年度には「まちじゅうがキャンパス・世界のトモダチ学研都市ORIO」をキャッチフレーズに開催される6月の「折尾まつり」にも参加し、活動している地域住民のサポートをして、交流を図った。24年度は出店し、25年度は大学からテントを10数張り借りて、車で運び、それを設営する仕事で、重労働のする仕事であったが、祭の主催者である商工会にとっては協力する若者がいないと成り立たない祭であると実感した次第で、大学祭実行委員会などが主導的に行動していた。そして、同じ学園からは留学生の参加する異国の料理が楽しめる「国際屋台村」などもあった。

集合



学生の感想

① 先日の折尾祭に参加させていただいて様々なことを学ぶことができた。自分が行ったときにはホットドックの販売は終了していたが、片づけは少しだ

けれど手伝うことができた。しかしその片付けも自分では少しだけしかできず実行委員会の人たちや先輩方の行動力はすごいと思った。折尾祭は、50の団体と実行委員60名を含む計400名のスタッフで作られているそうです。こんな大きな地域の祭りにかかわれたことをうれしく思います。

- ② 6月2・3日に折尾まつりがありました。大学から出店するというので、前日の1日に祭の会場準備を行いました。主にテントを建てるという仕事で、トラックからテントの部品を降ろしテントの骨組みを作っていきます。その後、シートを骨組みに付けます。これを数十張り建てていくので結構な重労働でしたが、協力してやっていきました。全てを建て終わった後に会場を見ると、ここで祭が行われるという雰囲気を感じることができました。そして祭当日を迎えました。折尾まつりは昭和63年に始まってから今年で23回目の開催です。祭会場は小さな子供からお年寄りまで幅広い世代の人達でごった返していました。フライドポテトや唐揚げなどの食べ物から水風船やスーパーボールなどの玩具までいろいろ売ってあり、それらを買っては楽しそうに食べたり、遊んだりして祭を楽しんでいるなど感じました。祭の最後には参加自由型の踊りを踊って祭は閉幕しました。すると、祭の余韻に浸ることなく後片付けが始まりあっという間に終わりました。祭に初めて運営側として参加していろいろ大変でしたが、祭にいく側では感じることはできない感情を持つことができた気がしました。今回のことは貴重な経験になって良かったです。

この他、平成24年度には「ありがとう折尾駅舎」感謝祭が行われ、96年間の折尾駅舎が解体され、新しい駅が2016年に完成するとのことで、この祭にボランティアとして参加し、折尾の商工会の人々と協力して祭りを盛り上げていった。

まとめ

このように、地域連携型教育を目指していくと、大学の周辺には地域の人々と多く交流できる機会が多くあり、祭などを主催する役所、町内会なども特に若者のボランティアを必要として、できるだけ参加してもらいたいと商工会などから連絡を受ける機会が多くなってきた。高齢化社会により、力仕事のみならず、活気のある若者が地域の行事に積極的に参加して、地域の活性化の役割も果たしてもらいたいという要望であろう。それで、学生を学園の周りの地域の人々と積極的に交流させ、いろいろな分野で知識を広めさせ、見聞を広くさせることも重要であると思うのだが、はじめは学生の側には質問をする勇氣、相手のしたいことを先に読む能力など積極性に欠ける姿勢も見られたが、このような行事にまずは参加させ、体験させ、地域にはどのような課題があり、それをどのように皆が解決しているかを考えさせ、また教員側でも学生に課題を解決させるような場を多く作り出すことも大事であろう。

Received date 2013年7月23日

参考文献

1. 山形大学エリアキャンパスもがみ編、「平成21年度フィールドワーカー共生の森もがみ、授業記録」、2010
2. 山形大学エリアキャンパスもがみ編、「エリアキャンパスもがみ研究年報2009」、2010
3. 小田隆治編、「学生主体型授業の冒険」、ナカニシヤ出版、2010
4. 大学コンソーシアム京都編、「第16回FDフォーラム2010年度報告集－組織的FDの取り組み」、2011

